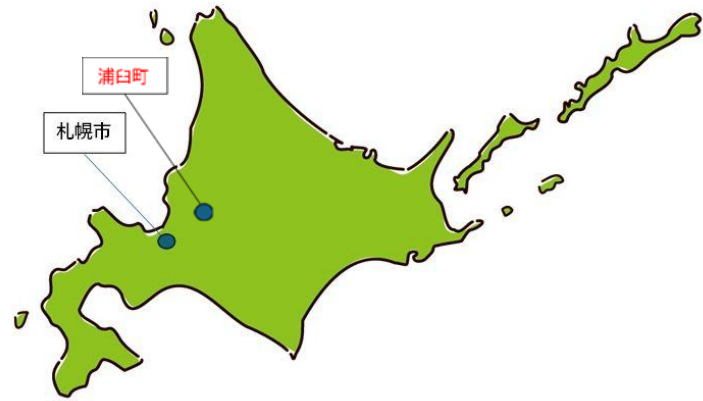


終わりになき図書館ジャーニー vol. 24



浦臼町農村センター図書室

浦臼(うらうす)町と聞いて何を想像するでしょうか？

空知、豪雪、トマト、ワイン、温泉、キリスト教、学園都市線(札沼線)・・実は多様なコンテンツがあります。

2020年に廃止になる前の学園都市線は、札幌から浦臼まで1時間40分ほどで行くことができました。私が訪問した2024年はJRで岩見沢の先、奈井江駅で下車。美唄自動車学校が運営する路線バスに乗り換えて浦臼に向かいます。私にとって当別、月形、新十津川町に行くことができるので学園都市線(札沼線)はとても大切な路線でした。そう、以前は札沼線と呼ばれていましたが、30年ほど前に学園都市線と変わったようです。今は石狩当別まで運行しています。ちなみに札幌から浦臼まで63キロほどの距離。人口は約1600人です。

ふるさと返礼品をよく見るようにしています。

浦臼はやはりワインとトマト加工物。さらに学園都市線関連のグッズ。鉄道ファンをしっかり抑えていますね。廃止になってまだ5年しか経過していないので、記憶に残っている人はたくさんいるかと思います。しかし列車の本数がとにかく少なかったのも、列車を見かける機会はとても限られています。最近廃止した鉄道の線路を剥がす箇所は踏切や駅付近が多く、それ以外は残ったまま。地元の方からすると、列車が運行していても廃止しても景色は変わらないのかもしれない。

町営バスがどこを運行しているのか町民は知らないとよく耳にします。町内を巡回するバスが多いため、時間がある時は町全体をザクッと見学でき、私はかなり活用しています。そしてゆっくり走るのも、のんびり眺めることができます。すると、地元の方が乗車してきて、なにげない会話を聞くことは大きな情報源です。

浦臼町役場でバスを下車。徒歩10分ほどで浦臼町農村センターに到着。この中に図書室があります。施設に入館すると、突然坂本龍馬のパネルが？！

浦臼町公式HPによると、「坂本龍馬の養子高松太郎が没した後、妻の留とその息子がすでに浦臼に入植していた坂本直寛を頼りに移住し、没するまで町内で駄菓子屋を経営して生計を立てながら町の発展に尽力しました。」

龍馬亡き後の坂本家の足取りを知ることができる、まさにファミリーヒストリーです。

ちなみに史料館には坂本家系図なども展示されているとか。明治31年の石狩川の大洪水で浦臼は壊滅的被害を受け、坂本直寛は板垣退助に陳情し、救済金を受けています。直寛は有志

達と「石狩川治水期成会」を設立。この運動によって、北海道庁内に「北海道治水調査会」が設立され、石狩川の本格的な調査が始まりました。小説『札幌誕生』（門井慶喜著）第5章「ショートカット」の主人公岡崎文吉はこの時期、既に道庁の技師として活動しています。

こじんまりとした図書室ですが丁寧に POP があちらこちらに立てられ、ミニ展示も積極的に行っています。浦臼町と姉妹町である高知県本山町出身の作家・大原富枝コーナーが常設されています。図書の貸出は手作業で、システム管理は行っていません。

坂本家といい、大原富枝といい、偶然に高知。そして浦臼と深い繋がりを知ったのはとても大きな収穫でした。どの町にも姉妹都市や町があります。そこを紐付けしてみると意外な人物や場所にたどり着くことができます。これも大きな意味での地域資料の1つではないでしょうか？

2024年4月訪問
加藤 重男